

SS 分等物質、分子、原子等の槽転移、転移、変位及び原子核及びエネルギー線の変位、昇華、消失

— 動態系ランダム科学・複合微生物動態系解析における複合発酵（情報微生物工学・情報生命工学・分子生物学）の解析・分析 —

*はじめに

解析・分析内容は、SS 分等物質、分子、原子等の槽転移、転移、変位及び原子核及びエネルギー線の変位、昇華、消失です。

今までにもこの類の研究は各所で数例発表されてきていますが、いずれも再現性と安全性に問題があり、研究成果として認められるレベルには達していないのが実状でした。

今回は40例以上ある実際に稼働している施設のデータより抜粋し、解析内容と説明を行います。都合上分析・解析の全データは発表出来ないことをお断り申し上げます。

はじめに、実施例の主な項目を紹介します。

- 1, 下水処理場より排出される下水処理汚泥・スラッジの分解・消失
- 2, 窒素・リン等の無機物の分解・消失
- 3, 鉛・亜鉛・銅・鉄等の重金属類の分解・消失
- 4, ダイオキシン等環境ホルモン（内分泌攪乱化学的物質）の分解・消失
- 5, 放射能・放射線等人体有害物質の分解・消失
- 6, 廃油・廃プラスチックの分解・消失
- 7, 生ゴミ・高濃度有機物の分解・消失
- 8, 海水・塩水の淡水化

以上の実施例は、水質分析データをもって証明しています。

解析実証例として以下のことをおこなってきました。

- i) 高濃度油脂（動・植物油）主成分ノルマルヘキサンの処理工程における物質の相転移・転移・変位・昇華（消失）
- ii) 高濃度原油の主成分C重油の処理工程における物質の相転移・転移・変位・昇華（消失）
- iii) 高濃度有機残渣物とケラチン・カルシウムの処理工程における物質の相転移・転移・変位・昇華（消失）
- iv) 多種類の化学合成物質及び染色廃液の処理工程における物質の相転移・転移・変位・昇華（消失）

以上の実証例と水質データ及び解析機器によるデータ分析をもって証明しました。

この実施例・実証例を研究対象範囲として、データ・解析・理論体系をもって、証明しました。

1.微生物解析

まず、「嫌気性菌類と好気性菌類の全ての微生物群を、共存・共生・共栄の動態系及び生態系に導く」このことを微生物の菌体数及び微生物の菌種属をもって証明しました。

実証例 i) の日本国静岡県A社の発酵槽・合成槽・分解槽中の生態系を、微生物分離法を用いて分離し、菌体同定を行いました。

尚、微生物分離後菌体を溶菌し、DNA抽出を行いその後DNAシークウエンサーにより1200bpの塩基配列を測定し、菌体同定に使用しました。(Fig 1参照)

水質分析法 (J I S k 0 1 0 2に基づく分析方法) を用いて水質測定を行いました。

複合発酵を行った処理では、処理が進行するに従って水質が安定し、PHなどは微生物が自分たちのもっとも住み良い環境PHで安定します。

たとえばPHが1~2の強酸性状態の処理槽であっても、複合発酵法では薬品による中和をしないで、処理進行により中性に近づいていきます。

つまり流入物質によって微生物群は環境を作り出して有害物質を変化させてゆくのです。

Fig 1の中のSS (Solid Sludge) を見て下さい。

通常の廃水処理では、処理が進行してゆくと有機物残量が少なくなるのですが、複合発酵法においては有機物質対無機物質の割合が変わりません。

しかし下段の分子量測定を見ると明らかに分子量が減少していることがわかります。

複合発酵法では「有機・無機物質」というように分かれてSSを考えているのではなく、全てのSSを「物質」として捕らえて、「有機・無機物質」を同時に処理してしまう性質を持っています。

続いて菌体数を見て下さい。

通常処理における生菌数は、10の8乗以上には増えませんが、複合発酵法ではその生菌数が10の15乗にまで増えているのがわかります。このまま時間を経過すれば10のn乗にまで菌体数が高められていきます。

ここでは細菌の細胞質 (c e l l) が収縮し、高濃度の酵素が結晶体となっていることが考えられ、走査性電子顕微鏡+X線解析により、三次元構造までの蛋白結晶及び酵素結合結晶体が観測されています。(Fig 1-2参照)

次に処理槽中の菌体を分離・同定しました。

酵母菌類の分離同定の方法は Fig 2-1 の手法を用いて行いました。(Fig 2-1 参照)

微生物DNAシーケンスデータをご覧ください。

菌体を分離・同定していく方法として、DNAによる菌体同定を用いました。(Fig 2-2 参照)

本来1200bpあるのですが紙面の都合上500bpまでとしています。

実験日は1998年10月より1999年5月まで行いました。

実験場所は、長野県上田市信州大学です。

この結果得られた菌体が次の Fig 3~7 です。(Fig 3~7 参照)

ここで見ていただきたいのが、「共生」です。

本来一緒の環境下では育成しないはずの細菌が、見事に共生しています。

今回は都合上、分解槽の微生物表の一部を見ていただきました。

ここでは詳しく説明しませんが、ここでは食品加工会社の発酵合成槽の菌体を同定した表をお見せいたします。

通常共生しない菌種が、ここでは共生しているのがわかります。

この中には大腸菌やフザリウムが存在しておりません。

また既存の微生物解析による同定法では解析できない菌体が多数存在し、未知の菌体が処理が進行するに従って増えていきます。

つまり処理する物質により微生物は自分たちで融合し、物質に合わせて変化していきます。

他の処理施設の合成槽・分解槽においては、違った微生物群が検出されていることがそのことを証明しています。

次に酵素を測定しました。

不思議なことに時間ごとに酵素が変化するためにどの時点のデータを採用するか迷いました。また酵素そのものが変わるだけでなく量も増えていきます。しかし菌体数が10の8乗数を越えない限りその様な現象は起こりませんでした。一例として実証例iv)の合成槽における微生物酵素の中間生成体の一つです。(Fig 8 参照)

次に特定微生物による排出酵素のエネルギー値を測定しました。(Fig 9 参照)

微生物はそれぞれに特定の酵素を出していることは周知の通りですが、その酵素は通常の微生物数では高濃度化はしません。複合発酵法では前述の通り菌体数が極端に多いため、排出される酵素も多くなります。計測当初は、総体酵素の排出エネルギーを測定し、パソコンにて計算させたところ、 10^8 の乗数までは計算できたのです。しかしそれ以上の菌体数になるとエラー表示もしくは設定によっては無限大の数値を表すことがわかりました。もっとも設定を無限大にしておけば、数百枚か数千枚の無駄紙を使用して打ち出すことは可能だと思われます。しかし環境問題の解決法を解析している私たちが、環境汚染を促進なんてできませんのでやめました。ここでは特定微生物の排出酵素だけを測定しました。そしてエネルギーが無限大になると、fig 1-2 で見ていただいた様に酵素が結晶化されていきます。

ここまでの微生物解析部分であり、その結果から次のようなことがわかりました。

- ①各処理槽の中で、全ての微生物群の共存・共生・共栄が認められた。
- ②菌体数=生菌数により菌体が死滅せずに無限の増殖を行う。
- ③未知の菌体が発生することにより、流入する物質に対する新しい菌種が現生する。
- ④排出する酵素エネルギーが無限大になると、酵素とエネルギーの凝集により酵素結合結晶化していく。

この結果から次のことが仮説として立てられます。

- i) 複合発酵法による微生物群の育成を行う。
- ii) 微生物の排出する酵素や代謝生成物が、エネルギー触媒による結晶体を獲得する。
- iii) その一つが乳酸発酵より得られる結晶体を生じ、その次にタンパク結晶体になり、その後酵素結合結晶体へと変化していくことが考えられる。
- iv) そしてその結晶体が触媒となり、全ての物質を常温下で核分裂・核分解・核融合による相転移を引き起こし、物質を昇華(消失)させている。
- v) 物質相転移を引き起こすと、その転移に伴い生じるエネルギーは、熱エネルギーではなく生体エネルギー(フリーエネルギー)である。
- vi) 生体エネルギーの保存場所として乳酸結晶体、酵素結合結晶体や蛋白結晶体に吸着し、蓄積される。
- vii) このエネルギーは処理水の中の物質に対し、結晶体とともに相転移等の触媒反応に利用される。
- viii) 排出されたエネルギーは、自由に変位、転移をすることができ、フリーエネルギーとしていつでも何にでも利用できる形になっている。

この仮説の中で一番問題となるのは、生体エネルギーが本当に原子核の核分裂、核分解、核融合の際に発生しているのか、この点については、次の物理・化学的解析により証明しました。

2.物理・化学的解析

ここからは物理・化学的解析に移ります。

ここからの Fig は、もともと OHP 用に作成した資料を、スキャナーにて読み込んでいます。(Fig 10 参照)

時間の都合上、写りが悪い部分もありますことをお断りしておきます。

測定試料は、静岡県 I 染工の処理水を使用しています。

測定日は 1998. 11. 2 ~ 1999. 6. 20 までです。

測定場所は、東京理科大です。

このグラフは、上が発酵槽、下が放流水の定性分析をした結果です。明らかに結合分子の種類は少ないのがわかると思います。

Fig 10 をさらに詳しくクロマトグラフィーで定量してみました。(Fig 11 参照)

発酵槽ではまだ合成分子が数多く存在しているが、処理が進むにつれ、分解槽では分子が少なくなっていることがわかります。これは、処理工程において処理槽の水中で分子形態が固体から液体へと相転移している。つまり、仮説通りに分子、原子イオンが分離分解され、分子として存在しなくなっている可能性がでてきました

その証明として処理工程における水素原子の推移を測定しました。

各処理槽及び原水のガスクロマトグラフィーデータです。(Fig 12 参照)

このデータは、合成槽における分子形態の相転移を証明するための、第一段階として水素原子を測定しました。各処理槽中の水素原子量は、合成槽でピークになっていることがわかります。

次に発酵合成槽の気相（気体）における分子を測定します。(Fig 13 参照)

グラフは、合成槽におけるガスクロマトグラフィのデータです。グラフの中の横軸にある、27.4 ポイントがヘリウムの存在です。このようにあきらかに、ヘリウムが合成槽に存在しています。しかし、前槽である発酵槽と後槽である分解槽においては、ヘリウムの存在を表している 27.4 ポイントの値はないのです。これにより、複合発酵における処理工程の中で、合成槽という中槽でヘリウムが存在しているということは、常温下における相転移が行われている可能性があります。

次に相転移の変位元素として、炭素原子が考えられるので、炭素原子を測定していきました。

次に相転移の変位元素として、炭素原子が考えられるので、炭素原子を測定していきました。

発酵槽の液体中の炭素原子を測定しました。(Fig 1 4 参照)

このように各槽の炭素量をGC-MSで測定しました。その他にもいくつかの化合物含有を測定しました。

その結果を表にまとめたものが次の Fig 1 5 です。(Fig 1 5 参照)

炭素化合物や他の化合物は、処理工程が進行するに従って少なくなっていくが、炭素原子は逆に増えていくのがわかります。これにより相転移の変位元素として、炭素原子が考えられます。相転移が行われているということは、分解エネルギーすなわち熱エネルギーが発生している可能性があります。

分解エネルギーがどれくらいの熱エネルギーを持っているかの参考資料として、各原子の持っているチャンネルごとのエネルギー値を測定しました。原子の熱エネルギー反応をγ線スペクトル分光分析器を使用してチャンネル間計測により熱エネルギー値を測定しました。この結果が Fig 1 6 です。

(Fig 1 6 参照)

各原子のエネルギー値をX線分析にて測定し、各処理槽及び放流水中のエネルギーを測定しました。特定元素-特定元素間の熱エネルギー値を求め元素間の熱エネルギー差を比較し、原子核操作における、熱エネルギー反応の基礎としました。もしこの結果通りに熱エネルギーが処理工程で起こっているとしたら、処理槽は爆発しているはずですが、しかし現実の処理工程における各槽の温度変化は、下降傾向はあっても上昇傾向はありませんでした。つまり、複合発酵法では、物質が分解されていっても熱エネルギー反応は出ないことを意味しています。

これにより、分子・原子が相転移しているにもかかわらず（核分裂、分解）、その放出されているエネルギーが熱エネルギーではないことがわかりました。

次にタンパク結晶体の中に存在する、エネルギー値をアイソトープ分析器により測定しました。(Fig 1 7 参照)

この測定については、通常に処理液を測定しても数値は出ません。また各結晶体を含む写真等は、すべて特殊な方法により濃縮をかけております。濃縮率は、約80倍～120倍に濃縮しています。何故ならば複合発酵法では、菌体も結晶体もサイズが非常に小さくなってしまうからです。クロマトグラフィーや波長による測定器では、ごく少量の関知はするが、構造体までは把握できないからです。

このグラフは、結晶体ごとのエネルギー値を測定しました。

かなりの量のエネルギーが観測されました。この結果エネルギーは、各結晶体に吸着されていることがわかり、微生物解析での部分とリンクする事がわかりました。

次に結晶体がどれくらいあるかを測定しました。(Fig 18 参照)

このグラフは、NMR核磁気共鳴回析器をもちいて測定しました。かなりの量の結晶体が存在することがわかりました。

具体的に、クロマトグラフィーを用いて量の測定を行いました。(Fig 19 参照)

結晶体の結晶化度を測定したところ約39.4%が結晶体に移行する状態にあると測定されました。この結晶体はすべて同じではなくエネルギー吸着体、中性子吸着体、情報触媒として働いています。この中で中性子吸着体としての働きについては、今回の発表には解析結果が間に合いませんでした。

最後にタンパク結晶体が出来る前のアミノ酸結晶体の写真ともう一度タンパク結晶体、酵素結合結晶体をみていただきます。(アミノ酸結晶体の写真参照)

この結晶体こそが全ての物質を昇華、消失させるものであり、中性子線を含む、全ての放射線をコントロールしているものであります。この結果、中性子をコントロールできることは、全てのエネルギーと情報を使って、物質を昇華・消失できるということに他なりません。

まとめ

今回の発表では都合上、すべての解析、実験の全データをお見せすることができませんでした。

しかし、これにより先ほどの仮説に対して、各実証例の処理工程を解析したデータを基に証明してきた結果、仮説通り、SS 分等物質、分子、原子等の槽転移、転移、変位及び原子核及びエネルギー線の変位、昇華、消失が証明できました。

そしてもう一つ、処理工程における核分裂、核分解、核融合より生ずるエネルギーは、分子形態が相転移、転移、変位しているにもかかわらず、処理進行に伴う温度上昇が見られないことにより、熱エネルギーではなく生体エネルギーであることが証明されました。

これにより、仮説はすべて証明されました。

本研究のもっとも優れていることは、先ほども申し上げましたが、いつでもどこでも再現が可能であることと有害物質を処理する技術の中で最も安全であるということです。

以上で、解析・分析の証明を終わります。